# 教職大学院 Newsletter No.115

福井大学大学院　福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科　since2008.4　2018.10.13


## 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 Summer Sessions 報告

2018 年 6 月 22～24 日に，実践研究福井ラウンドテーブルが行われました。35 回目の開催となった今回，3 日間を通じ 476 名の参加がありました。初日のプレセッション，学校（ZoneA）・教師（ZoneB1/B2）・コミュニティ（ZoneC）・授業（ZoneD）の各領域に分かれた 2 日目の各 Zone のセッションを経て，最終日はクロスセッションでの語り合い・聴き合いを行いました。2 日目は生徒ポスターセッション，3 日目のクロスセッションでは，ここ最近では当たり前の光景となりつつある英語による報告のテーブルもありました。福井ラウンドテーブルは，国内外の多様な世代と分野における実践と省察が出会うグローバル・コミュニティへと発展しています。ここでは，そのコミュニティに参画してくださった方々の声をお届けします。

### 専門職としての実践を振り返り，探究し合える仲間と共に過ごさせていただいた2日間

長野県信濃町立信濃小中学校（義務教育学校）教諭　結解　武宏

実践研究福井ラウンドテーブル 2018 Summer sessions（6 月 23 日）　ZoneA　学校：子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ「次代の社会を担う人材育成を目指した新たな学校づくり」のシンポジウムでシンポジストとして，義務教育学校３年目を迎えた本校の新しい学校づくりの実践を報告させていただきました。

平成 28 年４月より義務教育学校が開校し，９年間を通した教育目標のもと，小中一貫の教育課程を編成することができるようになりました。中一ギャップの解消，教師の専門性を生かした授業，地域の特色を生かした教育活動など小中一貫教育でできる多様な可能性があります。小中一貫教育を考えたとき，大切な視点の一つが「カリキュラムマネジメント」です。何ができるようになったか，何を理解しているかについては，教科書会社の HP や指導書などの単元配列表や系統表があります。そこで本校では，子どもの実態をもとに，９年間を見通して各教科で信濃小中学校カリキュラムを作成しています。カリキュラムを作成するにあたっては，どのような思考力・判断力・表現力をつけるのか，どのように見方や考え方を働かせるのかを明記しています。そして，カリキュラムは授業実践とともに変えていくもので，カリキュラムについて教科会で話し合うこと自体が価値のあることと考えています。

また，日々の授業実践を通して，この学年ではここまでできるようになる，という具体的な姿がつか

内容


6 月実践研究福井ラウンドテーブル報告（1）
スタッフ　自己紹介　（12）
夏の集中講座報告　（14）
ミドルリーダー/マネジメントコース便り（16）
インターンシップ/木曜カンファレンス報告（17）
福井大学教育学部附属特別支援学校「教育研究集会」案内（19）
福井大学連合教職大学院秋期説明会案内（20）

むことが大切であります。カリキュラムを日常の授業で生かすことで，専門職としての研修にもなります。本校では，月１回は同僚の先生方と互いに授業を見合って，カリキュラムに反映させるようにしています。

さらに，９年間を見通した学習形態や学習規律にもとづく授業づくりの推進としては，グループ学習，発表の仕方や課題の設定，家庭学習など，児童生徒の立場から学習形態や学習規律の９年間の連続性・系統性を考え，授業づくりへと生かしています。

義務教育学校ではありますが，前期課程と後期課程の連携がとりにくかったり希薄になっていたりしていることは課題となっています。そこで，「全職員で全児童生徒を支援していく」という態勢を実現していくためにプロジェクトを立ち上げています。普段なかなか行かない教室に行って「本の読み聞かせ」という形でかかわりをもつようにしています。そして最終的には，全児童生徒の名前を覚えることを目標にしています。わたしたち自身が虹となり子供同士や職員と子どもをつなぐこと，学校に何本もの虹をかけていこうと取り組んでいます。

参加したシンポジウムでは，福井県立坂井高等学校の吉田繁校長先生とご一緒させていただき，坂井高校の創業と守成をお聞きすることができました。前年踏襲を改善し，常に「坂井高校とは」を考え続けることなど，学校が地域とも連携・協働しながら，一つのチームとして機能するように，学校のリーダーシップ機能や学校の企画・調整機能，事務体制を強化するとともに，学校に関わる全ての職員がチームの一員であるという意識を共有する大切さを学ばせていただきました。

その後のフォーラムでは，敦賀市立敦賀北小学校の小島義和教頭先生とは，平成 33 年４月の敦賀市角鹿小中学校開校に向けて，目指す子ども像を設定し，９年間を通した教育課程 （教育計画）の編成や，系統的な教育のあり方について，文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール（ＳＳＨ）」の指定校である福井県立若狭高等学校の小坂康之先生とは， 理数探究科を中心に，全学科で探究学習を推進し，科学的な思考力や表現力などの向上を目指した課題設定能力の育成について，神奈川県私立カリタス小学校の中村恭子先生とは，児童生徒が問いをもち，主体的に学んでいく授業について，福井大学連合教職大学院の渡辺頑太さんとは，教職大学院で学ばれている授業の展開方法やカリキュラムについて皆様とともにお話しさせていただきました。

また，私は２日目の sessionⅣ（６月 24 日）の方も参加させていただきました。前任校の信州大学教育学部附属松本中学校に在職していたときにも毎年参加させていただいていました。自らの実践を基に語られる授業の展開，心に残っている出来事，その時に感じたこと，振り返る中で見えてきた文脈，気付いたこと等のストーリーに耳を傾けていると，自らの実践への省察が促され，共通する課題に気付き，さらなる一歩へと導かれていきました。異校種，異年齢のグループの中で，一人の実践について話し合うことはとても学びが深まります。また，今まで自分が備えていなかった視点をもって実践を振り返ることができると考えています。

私の分科会では，同志社中学校・高等学校の植田彩郁先生から，中高一貫教育における教科学習として，別役実「空中ブランコのりのキキ」の物語を味わう楽しみの実践の話をお聞きしました。核となる単元を設定し，登場人物について意見交換を行いながら，グループごとに配役を決め，脚本をつくりあげていく朗読劇の授業は，クラス全体で，読みの交流や深まりが生まれてくることを学ばせていただいた実践発表でした。植田先生自らの演劇経験についても大変興味深くお話をお聞きできました。

福井大学連合教職大学院の竹内達郎さんからは，子どもと過ごす中での授業づくりの実践を通して，子どもと共に成長していく姿を学ばせていただきました。多感で多様な子どもの価値観に気づきながら，竹内さんご自身が常に子どもの実態に対応して各教科の授業実践をされていることは，とても共感できるところがありました。そして，ファシリテーターの福井大学連合教職大学院の松田通彦先生からは，福井県教育研究所や福井県教育庁でのご経験からのお話をいただきました。

福井県の先生方は中学校に配属された場合であっても小学校の学習内容，高等学校の学習内容を理解することに努めていることや，個々の教職員のもつ力量は，学校組織の中で培われ，教師同士が学び合い，高め合う同僚性や当たり前のことを徹底して行うことへの福井県の先生方の意識の高さを学ばせていただきました。

多くのことを学ばせていただいた２日間でありました。私自身，信州大学教育学部附属松本中学校で研究推進をしていたときからご指導をいただいていました福井大学連合教職大学院の松木健一先生，今回のシンポジウムに関しまして多くのご示唆をいただきました福井大学連合教職大学院の中島健先生にも心より感謝いたします。今後も，福井ラウンドテーブルで多くのことを学ばせていただきたいです。

# ZoneB2の振り返りとまとめ

福井医療大学 教授　森 透

今回のゾーンＢ２のテーマは今までの継続で「これからの教員養成を学部・大学院を通して考える―実践を聴き，夢を語るー」としましたが，今回の特徴は学生を入れずに，教員養成に関わっている大学教員と現場の先生方などを中心として，どのような教員養成をしたらよいのか，どのような教員が理想なのかなどについて自由に語ってもらいたいと考えました。今回は学部生は遠慮願いましたが，福井大学教職大学院の院生には参加していただき，インターンシップの経験も含めて教える側の視点で一緒に考えてもらいました。

当日は13時から会場の２階のコミュニティプラザでゾーンＢ２の趣旨説明を世話人の大西先生が行ない，ポスターセッション（13時10分～14時10分）のあとの14時20分から始まり，司会進行は森が担当しました。最初に，話題提供で古屋和久先生（山梨県身延町立身延小学校・教諭）と小林和雄先生（世話人）からの実践報告が30分程度行なわれました。テーマは「「対話」と「振り返り」の質を高める教師力とは？」という内容で，具体的には古屋先生が「教科日記の可能性」について子どもたちが授業で学んだ内容の「振り返り」資料を提示して，学びの省察の重要性を述べられました。ゾーンＢ２のテーマとの関連で考えれば，子どもたちが授業で学んだ内容を「教科日記」を書くことで振り返り，自身の学びを確認する，可視化するということを，学部生や院生が大学の授業の中で実践しているだろうか，という視点で考えてほしいと思いました。

グループディスカッション（1グループ5名程度）は休憩も入れてから15時30分ころから17時20分までの約2時間程度行なわれました。グループでは，各大学・大学院における教員養成・教師教育のチャレンジの紹介や，小中学校の現場での実践や現場が求めている若手教員の教師力などについて自由に語っていただきました。私のグループは奈良女子大附属の鮫島先生がファシリテーターとなり，①金沢市野田中学校の坂下先生「若手教員研修の実践事例紹介」，②福井大学の浅原先生の「初等教育コース３系（学校・地域連携系）紹介」，③森の「福井医療大学養護教諭養成の実践」の3報告がありました。私にとって2つの報告は非常に興味深く，特に浅原先生のご報告は身近な大学にも関わらず，初めて具体的な取り組みをお聞きすることが出来，さらに報告書『地域連携教育研究Ａ・Ｂ』も配布いただき具体的な形で学部の取り組みを理解することが出来ました。深く感謝します。

17時20分からは全部で11グループの報告を各2分という非常に短い時間で報告いただきましたが，どのグループも活発な議論が展開されていたようで，どの班の報告も熱の入った内容となりました。Ａ３用紙にキーワードを書かれて報告いただいた班もありました。今回のゾーンＢ２で嬉しかったことは，福井大学の学部の先生方が複数参加されたことでした。今回は参加された方々が，次回の来年2月のラウンドにも参加され，ゾーンＢ２の継続課題に一緒にチャレンジしてくれることを期待したいと思います。

# 実践研究福井ラウンドテーブル参加報告

宇都宮大学 准教授　小野瀬 善行

2018（平成３0）年6月23日（土），同僚の石嶋和夫先生とともに，実践研究福井ラウンドテーブル2018 summer sessionsに参加させていただきました。23日は，「学校・教育・地域を考える4つのアプローチ」の課題の基に「A　学校」「B　教師」「C　コミュニティ」「D　授業研究」の分科会が設定され，ポスターセッション，実践報告（課題提起），テーマ別の話し合いが行われました。私は，「B②　これからの教員養成を学部・大学院を通して考えるー実践を聴き，夢を語るー」に参加しました。

まず，ポスターセッションにおいて「宇都宮大学教職大学院における取り組みー現状と今後の展望ー」と題して同僚と共に発表しました。特に教職大学院の学卒院生が長期インターンシップでどのような学びをしているのか，それは学部段階における教育実習といかなる相違点や特長があるのかについて述べ

ました。具体的には，院生が自分なりのテーマ・視点を設定して実習を行うこと，個人やチームにおける十分な省察を行っていることを挙げ，また，それを可能とする本学教職大学院の組織上およびカリキュラム上の工夫を説明しました。参加者からは，「教職大学院のスタッフはどの程度連携協力実習校へ赴くのか。」，「院生はどの時点で研究テーマを設定するのか。」といった質問が出され，議論を深めることができました。

その後，会場を移し，実践報告として山梨県身延町立身延小学校教諭・古屋和久先生の実践報告をうかがいました。古屋先生は子どもたちの「振り返り」を大切にし，教科ごとに「日記」を書かせる実践を行っており，そのような記録の蓄積を通して子どもたちの学びが深まり，成長している様子についてのご報告でした。

最後に，グループディスカッションとして，学部と教職大学院の接続，教職大学院と既存の教育学研究科の一本化を念頭に置きながら，各大学院の取り組みや現場に求められる教師の力などについて幅広い話し合いを行いました。報告者のグループでは，石川県立大聖寺実業高等学校にお勤めの先生（新採2年目），福井大学連合教職大学院の先生（美術専門），静岡大学教職大学院の先生，静岡県島田市教育委員会指導主事（静岡大学教職大学院修了生），福井大学連合教職大学院院生により話し合いをもちました。私は一発表者として上記の宇都宮大学の取り組み，組織やカリキュラムの特長について再度報告させていただきました。議論のなかで，本分科会の議論の柱のひとつである，既存の修士課程と教職大学院の一本化について議論を深められたことが大変得難い機会となりました。具体的には「既存の修士課程と一本化（スタッフがそのままスライドして教職大学院のスタッフとなること）をしない方向性は本当に素晴らしいと思う。」との本学の試みに対する感想を受け，勇気づけられました。また，他グループの参加者からも既存の修士課程との統合について多くの意見を拝聴することができ，今後の動向を考える貴重な機会となりました。教職大学院の改革動向を知り，本学の試みを発信するべく，日々の実践や研究の蓄積により一層励んでいきたいと意を新たにした次第です。このような機会を与えてくださった，森透先生をはじめ福井大学のスタッフの方々に深甚なる謝意を表明し，稿の結びと致します。

# 学びのプロセスが大切にされる保育・教育を目指して

仁愛女子短期大学　准教授　**増田　翼**

今回初めてラウンドテーブルに参加しました。私の勤務する仁愛女子短期大学幼児教育学科は，幼稚園教諭・保育士を養成するカリキュラムを編成し日々の教育研究活動を行っています。そのため，小学校以上の学校教育に携わる先生方が多数いらっしゃるラウンドテーブルへの参加に少し戸惑いもありましたが，同じグループの先生方と議論も白熱し，たいへん有意義な時間を過ごすことができました。

Zone B2 では，古屋和久先生（山梨県身延町立身延小学校）のたいへん興味深い実践報告をもとに，その後のグループ活動が展開していきました。古屋先生が実践されている「教科日記」は，まさに今回の学習指導要領（幼稚園教育要領）改訂に伴い強調されている「主体的・対話的で深い学び」＝アクティブ・ラーニングそのものであるとともに，昨今，保育の世界でも求められている評価観の転換を含むものだと私は読み取りました。つまりそれは，単なる結果や試験の解答のみで学習を評価する（しかも教員独自で）のではなく，子ども一人ひとりの学びのプロセスをクラスに携わる皆で評価し合うという空間の実現です。子どもたちは必ず何かに「関心」を寄せ，ときに「熱中」し，ときに「困難」に立ち向かいながら「他者」とのコミュニケーションを通じて学び（遊び）を進めています。こうした学びのプロセスそのものが，古屋先生の「教科日記」には記録されていました。さらにこのような学習履歴の「見える化（可視化）」は，子どもが自分の学びを振り返るとともに他の子どもの学びの様子を知る，保護者の方々へ学びの中身を伝達する，教員同士の実践の検討や改善の資料となる，といった様々なメリットが予想され，きっと保育・教育の質の向上につながることと思います。

さて，私も幼稚園教諭を養成しているという立場で，どのような教員養成が望まれるか，ラウンドテーブルに参加し感じたことを以下にまとめておきます。まずは①学生たちが「主体的・対話的で深い学び」とは何かを理解する（学習の本来の姿を理解する）ことが大切でしょう。これらは「教育原理」を

はじめとする各原理系科目が担う仕事といえるようでしょう。併せて学生は，実際に教員になってから，子どもたちの主体的な学びを支援できるような授業設計（板書の仕方なども）や環境構成の技術力を身につけなければなりません。これらは教科教育（保育内容）および方法学の仕事となるでしょう。次に②実際，子どもと関わるときに思考の道筋を整えたり，根拠に基づいて判断したり，さらに自分の言動に省察の目を向け改善を図ったり，という即自的な実践スキルの修得が必要です。これは，主に実習等での成長を期待したいところです。そして最後に，そもそも③学生たち自身が主体的・対話的・探究型の学習者になっていくことが重要です。そのためには，大学・短大全体の気風や設備面の状態，入学前・初年次教育やゼミナールの在り方などを今一度問い直すことが肝要でしょう。こうしたことを意識しながら，「質の高い教員養成を目指していかなければ」と奮起させていただいたラウンドテーブルでした。

# 実践研究福井ラウンドテーブルに参加して

福井医療短期大学看護学科　大口　二美

私は，長年の病院での臨床実践および看護管理を経て，看護師をめざす学生への教育に 8 年前から携わっています。この間，将来一人一人が主体的に学びつづけ患者に寄り添い，患者の中に潜む生きようとする力を引き出し，また医療がすべての効力を失ったあとも患者と共にあり，患者の生きる日々の体験を意味あるように助ける看護が提供できる専門職業人をめざして卒業してもらいたいと思い教職に就いています。しかし，年々，社会情勢の変化とともに，若者の変化に驚き悩むこともあり，看護本来の姿と看護実践を結びつけるための教授方法を模索している中で，森透先生から「実践研究福井ラウンドテーブル 2018」のご案内をいただきました。今までに看護基礎教育に関する研修として，公益社団法人福井県看護協会が主催する看護基礎教育検討委員会の企画で，福井県内の看護基礎教育を担う教員を対象にした講演や意見交換の研修会に参加していましたが，省察的実践者の教育というはどういう内容かを学びたく研修会に参加しました。

Session Ⅰ ポスター発表　Students Poster Session で，小学生が個々に工夫し課題発表を行い，その発表に対して中学生がしっかりとした視点で助言等をおこなっている生徒ポスター発表を見ました。先輩が後輩を育成している姿は頼もしささえ感じ，このような子供たちが将来，大学へ入学することを考えると，学生同士での学びと自主性を尊重した学習方法が身についている学生の力を活かした教授方法を再検討する必要があると思いました。

次に，ラウンドテーブルの【ZoneB2】「これからの教員養成を学部・大学院を通して考える－実践を聴き，夢を語る－」に参加しました。私のグループメンバーは大学院での教員養成に関わられている教員や院生，中学の先生や大学教育学部附属中学校の副校長と様々な立場にある方がメンバーでした。まずは，福井大学連合教職大学院の先生から事例報告がなされ，インナーメンタルの形成を主に学生の教職課程の構築とその試みと成果の報告がありました。その後のグループ討議で，人を対象とする専門職である教員や看護師を育成する教育者は，その教科の専門性と教科教育法の実践的な力量の形成が重要であると学びました。また，他のメンバーから教職課程を学ぶ学生の中にコミュニケーションスキルの形成が必要な学生がいること，教育実習を受け入れる側の先生からは，教師像のない学生が実習に来ており，日々実習が苦痛なように見える等の意見があり，看護学生に関する悩みや課題と同じものだなと思いました。

省察的実践者の教育という点では，充分に理解できたかは疑問ですが，インナーメンタル形成や教育法の実践的力量の形成の重要性，そして人を対象とする専門職業人の育成への悩みや課題は教員教育や看護師教育においても同じものであるなど，学びが多いラウンドテーブルでした。

このような有意義な場にお誘いいただいた森透先生に感謝申し上げるとともに，関係者の皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

# 福井ラウンドテーブル感想

2017 年度おおた区民大学若者企画講座企画員／早稲田大学大学院　博士課程 2 年

青沼　由衣

実践研究福井ラウンドテーブルは 2 回目，早稲田ラウンドテーブルも数えると 3 回目の参加となった今回の機会。回を追うごとに，ラウンドテーブルの重要性やおもしろさを実感している。

はじめて早稲田ラウンドテーブルに参加したときから実践報告の機会を得たのだが，そのときには「自分は報告するほどの実践をしていない」という気持ちが強く，恐縮していた。しかし，ラウンドテーブルや D. A. ショーン『省察的実践者の教育』を読む東京 cycle に参加するなかで，ラウンドテーブルは，これまでの実践の成果を聞き手に説得させる場ではなく，これまでの実践を話すー聴くの関係から見つめ直して学びを深めていく場であり，それはラウンドデーブルの内外をつなぐ大きな学びのプロセスを形成する場であるということを実感した。実践を向上させる学びのプロセスにおいてラウンドテーブルが力を発揮するためには，発表者自身の日頃の実践の見方，記録の仕方，報告のまとめ方が重要であると同時に，聴き手の問いかけ方が鍵となると感じている。

その点，6 月 23 日(土)に参加した Zone C コミュニティの分科会で報告された社会福祉法人光道園の事例から学ぶことは多かった。光道園では，施設内で起こったことを，職員や専門家を含めていくつもの段階を踏んで省察し，再構成してまた実践するというサイクルを繰り返してきたということだった。中でも特に印象に残っているのが，施設内で起こったことの見方である。一般的には，利用者がどのような行動を起こしたのかという事実の確認に終わってしまいそうなものを，光道園では，利用者の行動を職員がどう読み取って，どう行動したか，そして職員の行動によって利用者はどう変化したのか，その状況を見て職員は何を感じたのか，というように，事例を見つめ直す際の眼差しが職員自身，あるいは職員と利用者の関係性に向いていることが興味深かった。ラウンドテーブルをはじめ，実践の省察の場が実践全体を向上させる大きな学びのプロセスに位置付くためには，実践者が目の前で起きていることの意味を自分自身に深く深く問うていくことが求められるのだと感じた。

そして，そのような実践者の実践を見る眼を育てるのが，ラウンドテーブルでの聴き手の問いかけであると実感している。私自身今回のラウンドテーブルで報告した際に，自分では気づかなかった視点からの問いかけをたくさんいただいた。例えば，私は大田区の社会教育講座の企画員という立場で講座に関わっているのだが，社会教育指導員の方とは「一緒」に講座を作り上げているという協働意識があった。ただ，聴き手の方から，その「一緒」という意味は企画員と指導員で捉え方が違ってくるという趣旨の問いかけをいただいた。また，私は時系列順に実践内容を報告したのだが，聴き手の方から一人ひとりの学びのプロセスに焦点を当ててみると何が見えてくるだろうかという問いかけもいただいた。それは実践の見方に関わる問いかけであるため，実践の語り直しが求められることになった。

このように，ラウンドテーブルへの参加を通して，自分の実践への関わり方や見方を見つめ直す機会を得ると同時に，どのような問いかけをすれば他の報告者の実践がさらに深まっていくだろうかと考える中で，実践報告の聴き方についても考え直す機会を得ている。今後もぜひ，ラウンドテーブルやショーンを読む会に参加する中で学びを深めていきたい。

# 福井ラウンドテーブルに参加して

岡山市教育委員会事務局学校教育部指導課人権教育室　副主査　重森　しおり

私は，「福井ラウンドテーブル」の大ファンの一人だと自負している。ファンと言うと軽い感じがするかもしれないが，ここへ寄せてもらう意義は計り知れないと思っていて，毎回，岡山から数人が参加

させてもらっている。そんな思いを抱えつつ，今回初めて６月にあるラウンドテーブルに参加させていただいた。

１日目は「コミュニティ」の分科会で，「つながりの編み直しを支える」をテーマに語り合った。初めに事務局の半原さんから提起された「『コミュニティ』の捉え方の違い」が，とても興味深く，コミュニティの網の目は，そこに集う人の意思や思いで強くなることも弱くなってしまうこともあり，その中で編み直しを支えていくのだ，ということを再認識させてもらった。それをベースとして，今回もポスターセッションが，かなり充実していた。大学生を中心とした活動紹介の後，参加者との質疑・応答が行われるのだが，大人たちからのどのような問いに対しても，学生自身の活動への自負や思いと共に語られていたのが印象的だった。これまで先輩たちが培ってきたものや，前年，前々年の活動の積み重ねの上に，現在の活動が位置づけられ，その関わりの中で起こる学生さんや参加者の変容について考察することができた。その後のパネルディスカッションでの議論も様々な立場からの発言で刺激的であった。

２日目は，グループに分かれてのラウンドテーブルで，私はあるグループのファシリテーターとして参加させてもらった。３名の方から発表をいただいた。お一人目が教員の方。お二人目は学生さん。三人目は県外から参加の教員の方。

毎回のことだが，バックグランドも現在の職責も異なっている５人で実践を省察するわけだが，あっという間の５時間だった。ファシリテーターが指名しなくても，聞きたいことや語りたいことが，それぞれから溢れていた。

同じ教員という立場でも，視点やアプローチの仕方は異なり，学生や社会教育だとなおのことであるが，実践者から教えてもらうわけでも，誰かが教え諭すわけでもなく，実践を共に考え深め合い，時には批判的に実践を見つめ合う時間が今回も続いた。社会教育現場が長かった私にとっては，学校現場に関わっている方との対話はとても刺激をもらう。他では味わうことのできない醍醐味の一つと思っている。特に，学校現場での「その人自身が考え，行動していく」ための，教員の関わりや問いかけに気づかされることが多い。逆に，様々な年齢や人生を歩んできた人が暮らす「地域」での多様性が少しでも共有できていたら，私が参加している意味もあるかと思う。

今回は実践を語る立場でも，聞き役でもなかったが，他者の実践を自分の文脈にどう置き換えるか，自分の資質にどう転換するかを自然と意識して聴いていた。それは，あの空間の成せる妙だと思う。改めて，「問い」から始まる掘り起しや気づきの奥深さを体感させてもらった。

# 私自身のファシリテーター観の捉え直し

早稲田大学文学学術院　講師　矢内　琴江

今年で福井大学でのラウンドテーブルに参加するようになり 6 年になる。この間に，所属する早稲田大学や関わらせていただいた研究プロジェクトで，ラウンドテーブルを組織することにも関わってきた。こうした経験を通して，私なりに，ラウンドテーブルという学びの場が大事にしていることとして，ラウンドテーブルは実践報告を通して参加者が互いの実践をふり返り，実践の意味や価値，あるいは課題を共同で考え合う場として考えていた。今年のラウンドテーブルにはファシリテーターとして参加して，ファシリテーターの役割を捉え直したことから，これまで参加したラウンドテーブルのことも思い返しながら，改めてラウンドテーブルにおける実践報告と話し合いの意味を考えることにつながった。

今年のラウンドテーブルで，私はファシリテーターの役割の重要性を改めて痛感した。これまで私は，ラウンドテーブルのファシリテーターは，単なる司会進行やタイムキーパーとして報告者や聴き手の外側にいる人という位置にいる人ではなく，あるいは，単に参加者みんなが話せるように，話し合いを“回す”人でもなくて，聴き手としてもいながらグループの話し合いの展開を支える人と考えていた。そして，今回，ラウンドテーブルで自分がファシリテーターをやりながら，その難しさをいつも以上に感じていた。それは何だったのかと考えると，実践報告後の話し合いを実践をより立体的に捉える時間にするということや，グループの人たちの相互のコミュニケーションをいつもより意識していたからだった

と思う。例えば，実際に私自身は，報告の中で子どもたちの言葉を教員どうしが一緒に読み合い実践をふり返る機会を持っているのかを尋ねてみたり，報告の中で語られた「健康」という言葉について，私自身の経験と照らした時の私の捉え方を伝えてみながら，その言葉の意味についてどう捉えているのかをグループの人たちに聞いてみたりした。それは，私自身が，報告を聴きながら，実践の内部構造を一緒に捉えてみたい，もっと報告した人の思いを知りたい，あるいは実践を捉える自分たちの言葉をそれぞれの経験や社会状況に照らしながら吟味してみたいと思ったからでもあった。こうした，ラウンドテーブルでファシリテーターをしていた時の難しさや，自分の気持ちをふり返った時，ファシリテーターの役割とは，実践をより立体構造で捉えながら，実践の意味の深みを一緒につかんでいくためのグループの相互的なコミュニケーションが展開されるように働きかける人なのではないかと捉え直した。

こうしたファシリテーターの役割の捉え直しは，改めて実践報告とは何か，そしてその後の話し合いとはどのような場なのかを考え直すことにもつながった。これまで参加したラウンドテーブルを思い返したり，ラウンドテーブルに参加後のゼミ内でのふり返ったことが，この考え直しのきっかけになった。まず，例えば，他の研究会や報告会などでは，報告者は事前に話す内容をしっかりと準備して報告を完成させて発表する。だから，ラウンドテーブルで報告をするとき，私も参加し始めたころは，「完璧な報告をつくらないといけない」と思って，ラウンドテーブルのギリギリまで用意した資料を見つめていた。ところが，ラウンドテーブルの実践報告に関して，私が今回のラウンドテーブルを終えて思ったことは，実践報告とはこの場でグループのみんなで作り上げるものなのではないか，ということだった。これは，単純に，報告者は何も準備せずにやってきて，ただその場で話すことを考えれば良いというのではない。私自身も報告者を経験したからこそ，報告者にとって実践報告を準備する時間は，自分の実践の大事な省察の時間になると考えている。けれども，ラウンドテーブルはこの省察の結果や成果を発表する場ではない。実践報告によって，自分の省察を語りながら省察を深めていき，その後の話し合いによってより一層深めていく。同時に，自分自身が聴き手で参加している時のことをふり返ると，聴き手自身も，語られていることに思いをめぐらしてみたり，自分の経験や実践を思い起こしたりしながら，実践の意味や価値を明らかにする探究の中にいる。こうした聴き手の存在がいるからこそ，報告者は実践を語る言葉を紡ぎ出せるのであり，実践報告は聴き手との共同で成り立つのだと改めて考えた。

さらに，質疑応答の時間は，他の研究会や報告会だと，報告という“完成品”に対する質問，助言，評価になってしまいがちだ。質問の内容も，例えばイベントへの参加者数についてだったり，評価も実践の質に関わってというよりは，「この方法は役に立ちそうだ」という評価だったりすることがある。けれども，ラウンドテーブルの場合，報告を受けた話し合いでは，報告を聴きながら疑問に思ったことを言葉にしたり（例えば，子どもや仲間との関係の捉え方だったり，実践者自身の思いなど），聴き手の視点や経験から聴き取ったことを語ってみたり，自分自身の実践そのものを語ってみたりしながら，そのグループ全体で，聴き取った実践の意味をより立体的に捉える時間であり，それを通して，互いの実践の省察を深めていく時間でもある。私は，今までどちらかと言うと，聴き手のときもファシリテーターのときも，参加者それぞれの実践の省察を深めることの方に力点を置いていて参加していた。けれども，実践報告を聴いたり，あるいは報告者に対して一方向的に表面的な質問をしていただけでは，グループの人たちの実践の省察は深まることは難しい。今までのラウンドテーブルの経験をふり返ると，自分自身や報告者以外のグループの人たちも，実践の省察が深まったと感じたのは，グループの人たちが色々な角度や異なる視点をもって実践報告から聴き取ったことを伝え合いながら，実践をより立体的に捉えていく共同のプロセスを通じてであったように思う。だからこそ，ラウンドテーブルという場では，グループの人たちの相互的なコミュニケーションが育まれるよう，そして実践をより立体的に捉えていくような話し合いをつくっていけるよう支援していくファシリテーターの重要性を再確認した。

これまでに何度もラウンドテーブルを経験したが，今回の福井大学でのラウンドテーブルについて様々に捉え直すことになった。それは，私自身が，院生から今の講師（任期付）という立場になっていくキャリアの形成過程でラウンドテーブルと関わり続けているからだろうと思う。そして，この変化していく状況の中にいるからこそ，ラウンドテーブルに参加した後のふり返りの意味や，その掴んだことを言葉にしていくことが大事なのだということにも今回，この感想を書きながら気が付いた。こうした気づきも，また所属する早稲田大学のラウンドテーブルの実行員会のみんなとも共有しながら，秋のラウンドテーブルをみんなと準備をしていきたい。

# 福井ラウンドテーブル感想

早稲田大学文学研究科修士課程１年　佐藤　由衣

今回初めて参加した福井ラウンドテーブルは，総じて中身の濃い，盛だくさんなものであったと感じました。ここでは，特に２日目の内容について自らの報告や反省も含め，感想を述べていきたいと思います。

福井に足を踏み入れるのも初めてであり，ラウンドテーブルという形式での学びを体感するのも初めてでした。そのため今回報告者としての機会をいただいたのですが，どのように目的を捉え，そのためにどう準備すれば良いのかと，戸惑うことばかりでした。

最終的に，島根大学教育学部に在籍していた時に行った親子を対象とする社会教育活動の実践を報告しました。それまで大学の先生が担当していた企画や当日の運営・司会を学生が行うことの意味や，その難しさ。親子間のコミュニケーションを促すという役割や目的に沿った活動の選定などの難しさ。そして何より学生のスタッフも含めた携わっているすべての人との連携やコミュニケーションの大切さ。などの実践を通して感じたこと，学んだことを発表しました。

私のグループは，私の他に４名の方がいらっしゃいました。福井大学教職大学院のスタッフの方，教育委員会の方，小学校教諭の方，中学校教諭の方でした。大学院に在籍している今，“現場”を知らない私にとって今まさに現場で実践をされている方の報告を聞くことができるのはとても刺激的でした。「独りよがりになってしまった」「自分はここが失敗したと思った」など，自らの実践をエピソード形式にまとめ，振り返りながらご自身の考えや価値観を再構築していたような発表でした。まとめられた文面は，その先生が感じた葛藤や迷い，そしてその状況の様子までもが丁寧に綴られていていました。聴きながら，報告の内容が自然と頭に映像として浮かんできて，よりリアルで，より共感できるものでした。

話すのも聴くのも頭の中がいっぱいいっぱいになるくらいの濃い半日だったのですが，ラウンドテーブルを終え，大学院に戻りじっくり振り返ると，反省点もいくつか見えてきました。ここでは，話す側の視点と聴く側の視点の２点に絞って簡単ではありますがまとめたいと思います。

報告者としての反省ですが，私は報告する姿勢の中に「自分の報告する内容を知ってほしい。あわよくば教材として報告の中の教育観を使って欲しい。」というのが少なからずあったと自覚しました。今思えば，傲慢であったなということ，そしてラウンドテーブルの目的を履き違えているような態度であったなと思っています。ラウンドテーブルは，実践の報告の良し悪しを競うものでも，そしてそのプレゼンの場でもないことを痛いほど感じました。

そして聴く側の反省ですが，同じグループの人の実践の報告を聞きながら，もっとその人の大きな根元の部分，教育観や人生観のような深い部分に踏み込めたら良かったと思いました。そういった質問ができれば良かったと思います。実践の内容自体にも，自分にはなかった視点やアイディアがあり，良い気付きとなったのですが，それよりももっと高次な，実践のプロセスやその裏にその見え隠れする実践者の考え方や背景のようなものを聞くことができれば，手応えのあるより良い実践報告の場になったのではないかと思います。それぞれ取り組む場所やアプローチは違えど，最終的なミッション(目的，目指す方向)は共通している。そんな意味での「仲が良い」関係というのは，今回のラウンドテーブルのグループで垣間見えた可能性があったのではないかと思います。自分自身がそういったスタンスで発表をできなかったこと，そして聴くことができなかったことを反省しています。

最後に，欲を言えば，もう少し時間が欲しかったという風にも思いました。最初割り当てられた時間を聞いた時には，「長い」と感じましたが，実際にやってみると「短い」，とても短かったです。消化できなかった質問，踏み込めなかった点，その場でもそうでしたが今振り返ってもたくさん出てきます。今回の参加したことで，報告者の立場でも，ラウンドテーブルを創る一人という立場でも，ラウンドテーブルの奥深さと難しさを知ったような感じがします。今回の反省を踏まえて，別の機会では実践の中身よりもそのプロセスを大切にした共有の場を作っていきたいと考えます。

# 「共に生きる」ことを支えるコミュニティを支える省察的実践の取り組みから学ぶ

西東京市田無公民館　公民館専門員　鈴木　麻里

「『生産性』があるかないかで人を仕分ける」という考え方が蔓延している世の中において，「共に生きる」ということを，多様な人々と共に考えていくことが本当に必要だ。そのためのヒントを，実践研究　福井ラウンドテーブル　Zone C コミュニティ分科会で発表された杉本博氏（社会福祉法人光道園理事）からたくさんいただいた。

光道園とは，昭和 32 年に自らも全盲という障害を持つ初代園長中道益平氏により創設された身体障害者更生施設で，昭和 41 年には日本初の盲重複障害者のための重度身体障害者授産施設を開設。創設 60 年の現在も「光道園精神」が継承，実践されているという。それは「人を人として尊敬すること」「いかなる人間であっても，必ずやその一人ひとりの中にすばらしい長所があるはず，障害をもった人達の体内に必ず可能性があるはず，その可能性を求めて歩み続けてほしい」という創設者の思いであり，その思いをつないでいくために，35 年以上にわたり毎年「重複障害講座」「生活支援事例報告会」が開かれ，450 事例を超える実践研究記録としてまとめられているという。

その実践記録の中の 1 冊『施設で生きる　省察的実践者が育つコミュニティを創る』（※１）によると，「重複障害講座」に参加する職員は，綴られた事例を読み，1 年後にはひとりの利用者について自分の実践を書き上げる。そこでは利用者の「問題行動」を判別・診断し矯正・治療し解決するためではなく，利用者の思いを理解し共に生きていくための手立てを見つけていくような実践が求められている。さらに，事例は，利用者を実践者である「自分」と切り離して，客観的な対象として記述するのではなく，「利用者」と「自分」と「両者が生きる生活世界」との三項関係の中で記述する。従って事例の対象は利用者だけでなく，筆者である「自分」が含まれており，「自分」がよりよく共に生きるための実践でもあり，職員としての当事者研究でもあるという。

私は2013 年に西東京市保谷駅前公民館に配属になり，若者の生きづらさ，働きづらさをテーマにした講座を担当してきた。それらの講座から立ち上がったサークルでは，ひきこもっている子どもを持つ親御さんや精神障がいの当事者の方など様々な生きづらさを抱える市民が主体となり，地域活動を展開している。

2018 年に田無公民館に異動になり，「8050 (7040) 問題」といわれるひきこもりの長期化，高齢化の問題をテーマに講座「地域から“孤立”をなくすヒント」を実施した。また，障がい者学級「あめんぼ青年教室」の担当として，月 4 回，知的障がいのある 20 代～60 代の学級生と一緒に活動している。

上記の実践も含め，今までに 5 回ほど，実践記録をまとめる機会があった。福井から帰る電車の中でこの本を読みつつ，自分が今まで書いてきた実践記録は，＜「利用者」と「自分」と「両者が生きる生活世界」との三項関係の中で記述する＞ことができていたのだろうか，という考えが頭の中をぐるぐる駆け巡った。この本の正直に，率直に書かれた文章に衝撃を受け，その実践が 35 年も前から繰り返され蓄積されてきたという学びの厚みに衝撃を受けた。

そして＜「利用者」と「自分」と「両者が生きる生活世界」との三項関係の中で記述する＞という実践があるからこそ，「共に生きる」ことができるのではないかと，私の中で点と点が一本の線につながったように感じた。

杉本博氏の発表の終盤，光道園で亡くなられた，お二人の盲ろう障害者の方に対して「光道園で満足できる生活を送っていただけたでしょうか？」と問われた言葉に心揺さぶられ，子ども時代のことを思い出した。

私の実家は地方都市で三代続いたクリーニング店で，郊外に工場を建て機械化されるまで，クリーニング店２階の住居を仕切って，住み込みの従業員が暮らしていた。高度成長時代，深夜労働は当たり前で，当時 10 歳ぐらいだった私も家事労働の担い手として，小学校から帰ると毎日６合～８合の米を研ぐのが役目だった。住み込みの従業員のうち二人は聴覚障害者の男性で，午後３時の休憩時間に，ソファーに座って手話で楽しそうにやり取りしている光景を覚えている。二人以外の従業員のほとんどは私の母の妹たちが結婚するまでの一時手伝いに来ていて，休みの日にみんなで卓球をするのが楽しみだった。聴覚障害のある従業員の一人 Y さんは，工場勤務となったタイミングで結婚し家庭を持った。もう一人

の M さんは近所にアパートを借り，実家の一階にある店舗に残った。私は 18 歳で上京したため詳しくは知らないが，M さんは家族との交流がほとんどなく，飲酒などの影響からか入退院を繰り返し，最期は私の父が看取ったと聞いた。Y さんに比べ，M さんは可哀想な人生だったと私は勝手に決めつけていた。

しかし，杉本氏のお話で，私の中にも「『生産性』があるかないかで人を仕分ける」という偏見があると気づかされたのだ。M さんは，家庭はなかったが入退院を繰り返しつつもつながりのあった父に看取られた。当時の卓球台は，今は弟の家にあり，私の家族が帰省したとき卓球をしながら，M さんの思い出が語られることもある。

「障害をもった人達の体内に必ず可能性があるはず，その可能性を求めて歩み続ける」という光道園の精神に学ばなければならないことは，まだまだたくさんあると感じている。

参考文献：
※１『施設で生きる　省察的実践者が育つコミュニティを創る』社会福祉法人光道園 編　川島書店 2017 年

# 探究的な学びとそれを支える教師の協働探究を学ぶ

山梨県立吉田高等学校 教頭　廣瀬　志保

ZONE D　授業研究では，校種，世代，国境を越えた視点で問題提起がされ，改めて探究的な学びとそれを支える教師の協働探究について学びました。

福井市美山中学校の佐々木庸介教諭は地域素材を生かした総合的な学習の時間（以下　総合学習）の実践を発表されました。「美山（地域）の宝とは何か？」という問いから家族への聞き取りや文献調査をして発表。発表で出た内容をマッピングで「自然」「歴史」「食文化」に分類して，校外学習につなげました。ここでは教科横断の取組もあり，アウトプットするために国語の授業で表現を豊かにするとか，理科の授業で自然の豊かさを学ぶなど教員間の協働も見られました。「人々の想い」が宝だというまとめから，職場体験や金沢研修旅行を宝でつなぎ，最終的には東京修学旅行で特産品の販売をしたり，東京大学で成果発表をしたりするというダイナミックな実践でした。教員７年目の先生がボトムアップで全校を巻き込んだこの実践に感動しました。また，佐々木教諭自身が，かつて総合の授業で環境や防災を学ばれたときのプロセスを今でも語ることができ，その時のノートを大切にされているというお話があり，探究学習の「力」を感じました。

次に，福井市和田小学校の塚本康一教頭からは，マレーシアの日本人学校で 3 年間教頭として勤務された経験と帰国後に，小学生と現地とのスカイプでの交流授業などをされた実践をうかがいました。必然性のある課題を設定することや，探究を長いスパンに組み込んでいく事の重要性を再確認させて頂きました。また，管理職としては①ビジョンを明確にして，②同僚性を高められる場面を設定し，教師同士が達成感を味わえるよう工夫し，③カリキュラムマネジメントの観点からは如何に協働体制を作るかということを学び，④危機管理の重要性も身に沁みました。教師に探究の輪を広げていくためには①ネットワークの構築，②信頼関係づくり，③積極性が大切だと教えて頂きました。

３人目のマラウイ国教育科学技術省教員教育開発局ジャスタス・カーター氏は複数の中等学校が集まって学校運営や教員研修を改善する組織単位であるクラスターの取組を話されました。教師が芝生の上で授業研究をしている写真は印象的でした。教師の協働による授業研究によって確実に生徒が学習の中心となる授業実践が増えていることが理解できました。海外の取組みも刺激的でした。

次のセッション「中高の実践に学び合う」では，至民中学校の中内優子教諭が建築鑑賞を通して生徒の主体性を引き出していた姿，大野高等学校の佐藤拓也教諭は国語科の授業と，地歴・公民科などとの教科横断の授業実践をされ，教材研究と教科横断の取り組みの促進が生徒にもたらす効果の大きさを感じました。

新学習指導要領では高校の新教科として古典探究や地理探究など「～探究」と名のつく科目が新設され，「総合的な学習の時間」も「総合的な探究の時間」と変わります。「探究的な学び」とはどのような学びか，それを教師がどの様に支えるのか大きな示唆を頂きました。高阪将人先生はじめ企画・運営をして下さった先生方に感謝いたします。

# スタッフ　自己紹介

## モスタファ・ヤスミーン

9月16日付で本学連合教職大学院の准教授として着任したモスタファ・ヤスミーンと申します。専門は言語学（主に日本語文法）です。8 月末まではサウジアラビアの東にあるアルフフーフ市の NADA インターナショナルスクールにて，6 年生と 7 年生，日本でいう小学校 6 年生と中学校 1 年生の英語教師として 2 年間勤めていました。

NADA インターナショナルスクールはイギリスのケンブリッジ大学から承認を得て，ケンブリッジカリキュラムである IGCSE（International General Certificate of Secondary Education）を応用している学校の一つです。そこでは、21 世紀の学習手法の一つであるアクティブ・ラーニングを取り入れています。これまで私が受けてきたような「知識や情報の伝達型」の教育ではなく，子どもたちが積極的に活動に参加し創造力を高める学習を行っています。NADA インターナショナルスクールで仕事を始めた頃，女性にとって制限の多い，自分の文化と大きく異なるサウジアラビアに初めて住むだけではなく，この馴染みのない教育法に直面し衝撃を受けました。しかし，考えさせられる場面も多く，子どもに教えながら自分も学ぶ立場にありました。今振り返ると，この仕事に就いていなかったら，現在の仕事には繋がらなかっただろうと思います。ここからは，少し遡って自己紹介をさせていただきます。

私はエジプト出身で，私立のインターナショナル・シスターズ（修道院）学校を卒業しました。私はイスラム教徒なので「イスラム教徒なのにシスターズ・スクールに入れるの？」とよく聞かれました。シスターズ・スクールは修道女によって運営されていますが，生徒はキリスト教徒に限られているわけではありません。イスラム教徒もキリスト教徒も，共に勉強することができます。宗教が異なっていても皆平和的に共存することを，この学校できちんと学びました。その経験をきっかけに，私は今でも宗教・文化を問わず誰でも受け入れることができ，異文化環境を楽しむことができます。

学校を卒業してからは，エジプトにあるアインシャムス大学外国語学部日本学科に入学し，日本語日本文化について深く学びました。同大学の日本語学科は開設されたばかりで，私は第 1 期生でした。新しい言語を学ぶことが大好きな私は，入学当初わくわくしていました。しかし，2 週間経つと日本語の困難さにショックを受け，日本語の学習を諦めたくなりました。しかし，すでに 2 週間が過ぎていたこともあり，他の学科に転入してもついて行けないかもしれないという恐怖感が勝り，仕方なく日本語を続けることにしました。数か月経つと，日本語の魅力が見えてきました。エジプトでも日本文化に触れる機会があったため，日本語の勉強に対する好奇心が戻りました。3 年生の時，日本大使館が実施していた試験に合格し，日本語日本文化研修生として金沢大学に 1 年間留学することになりました。そこでは特に「体験実習」という授業で，日本文化に実際に触れることができ，様々な経験を重ねることができました。

大学卒業後，アインシャムス大学大学院日本語学科に進学すると共に，同大学の助手になりました。当時，助手は科目を担当できない規則でしたが，大学院の新設と教員不足という現状にあり，翻訳の授業を担当することになりました。学生と年齢があまり変わらず，教育経験もない私にとって，それは非常に難しい挑戦でした。しかし，先生・学生という上下関係ではなく，共に学ぶという水平的な関係から，学生に合う様々な方法を考え困難を乗り越えようとしました。当時大学院が開設されたばかりで研究に必要な資料が十分なかったこともあり，2006 年 4 月に日本大使館推薦で改めて奨学金を得て，名古屋大学大学院文学研究科に進学し，2009 年に修士号を，2013 年に博士号を取得しました。その間の日本滞在は最も長く，豊かな経験をしました。2007 年に結婚して，2008 年 7 月（修士論文提出の 5 か月前）に長男が生まれました。論文を執筆しながら子育てをするのは大変でしたが，今振り返ると，そこから時間の管理や優先順位をつけることをよく学べたと思います。子育て，研究に加え，日本語・アラビア語・英語の通訳や翻訳の仕事も行いました。

2015 年 12 月に主人の転職でサウジアラビアに引っ越すことになりました。女性にとって制限の多い同国に引っ越すことは心配で，更に日本で生まれ育

った息子にとってもよい環境であるかどうか不安でした。日本語がほとんど使われないサウジアラビアで私はいったいどうするのか，自分の将来を心配しました。しかし，ある出来事で私の運命が変わりました。息子が入学したNADAインターナショナルスクールで，英語教師として勤める機会に恵まれました。日本語とは全く関係ないとはいえ，教育に関わる分野であるため，広い意味で捉えると決して悪くはないと思いました。その学校で，初めて21世紀の教育手法の一つであるアクティブ・ラーニングを経験しました。馴染みのない教育方法を活用しながら子どもたちに教えることは容易なことではなく，戸惑いながらも工夫を凝らしました。子どもたちの好奇心や創造力を生み出すような協働的な活動を行うために，まず自分がよく考えました。子どもたちのレベルは様々で，また，女の子のクラスに合う活動と男の子のクラスに合う活動は必ずしも同じとは限らず，常にプランBを考えながら，子どもたちのその時々に合う活動にチャレンジしました。そうしながら，自分もいろいろ学びました。あの時はもっとこうすべきだった，あの子にはこう対応すべきだったと思う場面が多いです。

今回，本学連合教職大学院に勤めることになり，非常に嬉しく思います。今までの経験を活かしながら，スタッフの方々と協働したいと思っています。連合教職大学院は，教師教育の分野において，他大学とは異なるプログラムや教育方法を実施しています。まだ着任して1ヶ月ほどですが，スタッフと院生の方々が共に学び合いながら，協働的な学習の場を築いていると感じています。みなさんと共に，自分のこれまでの経験や学習を更に越えるような学びをしたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

# 夏の集中講座報告

## 夏の集中講座を終えて

学校改革マネジメントコース2年/なかよし保育園　岩倉　直美

昨年の集中講座は，専門書を読み終えることも読み解くことも難しかった。拾い読みでレポートを書き，論点なども軸がなかった。合同カンファレンスすることで，理解につながる実践や理論を見出すことは少しできた。今年は，年度末の長期実践研究報告を書くことにもつながるように丁寧に読み進めたいと思ったが，読み進めるためにもらったアドバイスで，自然なリズムで読んでいくことはできず，専門的な用語の意味を捉えることにこだわってしまうことが多かった。でもマネジメントの実践や組織について振り返り探究していく手立てのようなものは，専門書から学ぶことはできたのではないかと思う。

Cycle１では，斎藤喜博先生の『学校づくりの記』を読んだ。昭和２７年から昭和３３年の小さな村の学校教育が階層に支配され，先生たちは肩身の狭い思いをして教育に携わっていた状況を，斎藤喜博先生が村の学校教育を公的なものにし，みんなの力で押し上げていくような体制をつくっていく実践であった。私は，法人園に勤務してマネジメントをしていく立場ではなく園長を補佐していったなかでの振り返りや，今春には他の法人園で園長としてマネジメントをするチャンスをもらったが，辞めてしまったことの振り返りも重ね合わせながら，読み進めることができた。創立の礎を知ることの大切さや，人を育てたり環境を整えたりしていくには，実践を通して常に語り合い聴き合いを積み重ねて年月をかけていくことで確立していくことを実感し，その過程が充実していないと，人を育てていくことにつながらないのではないだろうか。

Cycle２では，『学習する組織』を読んだ。組織が活性化するには，まず人間関係のスタートがある。私が乳幼児保育(教育)の仕事に就いたとき，この仕事がやりたいという強い願望はなかった。就職して出会った主任(後に園長)の子どもに向かう姿勢に心が動かされて，今も子どもを通して学び続けていけることに感謝している。そこには，組織のなかでの学びが大きい。合同カンファレンスで，仲間と対話して，批判もこらえて共有して「やっぱり変わりたいよね。」の気持ちが，批判的なことを言われても，受け止めながら考えて行動することにつながるということが話された。対話することで，同じ思いをもった人がいることがわかったり，継続してやっていけることが見つかったりすることを，私も経験してきた。組織の姿勢には，無条件の献身，ごまかしのない勇気があるということから，園長を任された時この姿勢は私にはあったが，ごまかしのない勇気は私のなかで取り違えをしていたかもしれない。職員に実践を語ってもらい，そこから自分のやりたい，自分を変えたいなどの思いを引き出すことをして，実践を通して子どもの育ちが変わっていくことや，保育者集団も変化することに気づくきっかけや過程だけは構築することを，最低任務として成し遂げなければならなかったのかもしれない。

Cycle３では，長期実践研究報告に向けてCycle１，Cycle２で読んだ専門書や合同カンファレンスを振り返り，また昨年の実践などから，どのように書くことを進めていくかを考えていった。特にコミュニティ形成については，昨年『コミュニティ・オブ・プラクティス』を読んで，子どもの育ちを支えるコミュニティを探究することを心がけた。Cycle２の合同カンファレンスでコミュニティは，自由度が高いモノとしてとらえる。思ったことをしゃべる，そういうことをベースにする。それがいつの間にかチームになり，自然発生的にできた時にコミュニティ形成になっていく。また，やりながら変化していくモノであることなどを話し合いで確認した。コミュニティの形成や変化が保育の質も高めていくこと，またそこでの学びの共同体は，子どもも保育者も保護者も，互いに学び合うことが軸となることを考え整理し，長期実践研究報告をまとめていきたいと思っている。

Cycle１の最終日の講座終了後，カンファレンスグループメンバー３人で，東尋坊へ出かけた。台風情報が流れるなか，夕日が沈む光景と沈んだ後の空の

色の変化に美しさを感じ，久し振りにゆとりの時を過ごし心が癒された。経験したことのない酷暑が去ってホッとひと息。でも地震，台風と自然災害が続くことに心が痛む。この原稿も台風２４号が日本列島を縦断する情報が流れるなかで書き終えた。

# 2回目の夏季集中講座に参加して

学校改革マネジメントコース2年/坂井市立高椋小学校　佐藤　恭二

また，暑い夏がやってきた。今年は記録的な猛暑が続き，暑さの中で厚い本と格闘し，頭の中が熱くなった９日間だった。昨年度は，サイクル１で堀川小学校の『生きかたが育つ授業』，サイクル２でＥ．ウェンガーの『コミュニティ・オブ・プラクティス』の実践書を読み，実践の背景を省察しレポートにまとめた。サイクル３では，これまでの実践をもう一度洗い出し，整理するという作業を行った。サイクル１・２ともに限られた時間の中で読み解きレポートにまとめる，サイクル３では，研究の柱が不明確な実践をまとめる，ということにたいへん苦労した。

昨年度の反省を生かして，今年度は少し早めに読み進め，夏季集中講座に臨んだ。

サイクル１で読んだのは斎藤喜博氏の『学校づくりの記』。見通しをもった学校運営のつながり，教職員同士のつながり，学校と保護者を含めた地域とのつながりなど，斉藤氏が幅広い方面への働きかけに驚かずにはいられなかった。斎藤氏のさまざまな実践は，すべてが「子どもの成長のため」が根底としてあり，描かれた児童像に向かってなされた「しかけ」が，人や環境を変え，教師の意識と技量を高め，保護者や地域の信頼を深めていったのだと思う。長期的で大きな展望・目標をもって，そこに向かっていくことが大切だということを改めて学んだ。今でこそ「チーム学校」とよく言われるが，斎藤氏が生きたこの時代に，学校と家庭と地域が強いネットワークを作り，開かれた学校の体制を構築したことに感銘した。社会がめまぐるしく変化し，子どもも地域の課題が多様化している今だからこそ，斎藤氏が取り組んだ学校と家庭と地域が連携をとり，学校を作り上げていくことの必要性を学んだ。

サイクル２で読んだのは，ピーター・Ｍ・センゲの『学習する組織』。もちろん，昨年度の反省を踏まえて，早めに少し読み進めておいたのだが，量と内容の難解さに手こずり，読み取ったというよりは，意味の理解できる部分を切り取ったという感じであった。そのため，内容を消化しまとめるというより，自分なりの解釈をしてレポートにせざるをえなかったというのが正直なところである。センゲは，「学習する組織」の創造に必要とされるような変化をもたらすのはとてつもなく困難な仕事であり，真のリーダーシップが必要であると語っている。ここでいうリーダーは，経営者でもなく，経験豊富な上層部の人間でもない。「学習する組織において，リーダーは設計者であり，教師であり，執事(スチュワード)である 」という基本的役割があるとしている。サイクル１で読んだ斉藤氏のリーダーとしてのあり方はセンゲ氏のリーダー像とリンクしているように感じた。

サイクル３では，「これまでの教師のあゆみや実践の稜線をたどる」ことを主眼に置き，自分自身の過去と向き合う時間となった。教師となった３０年前からの経験や実践を思い起こし，実践書の理論を省察し，そしてグループのファシリテーターの先生や院生との話し合う中で，一つの大きな柱が見いだせたように思う。それは「つながり・つなぐ」ということである。

現在，本校はスクールプランの実現に向けて，４部会に分かれさまざまな取り組みを進めている。私自身は，「つながりのある学校部会」に所属し，学校運営や４つ部会のつながりを意識し，実践しているつもりである。この夏季集中講座で改めて実感した「つながり・つなぐ」をこれまで以上に意識して，学校全体が学び合い，高め合う実践を進めていきたいと考えている。

## ミドルリーダー・マネジメントコース便り

# 学校改革マネジメントコース2年目

学校改革マネジメントコース２年／奈良女子大学付属小学校　阪本　一英

福井大学教職大学院の学校改革マネージメントコースでお世話になって，もう２年目の半ばが過ぎてしまいました。実は，私が勤務している奈良女子大学附属小学校は，学校改革マネージメントという視点での実践が息づきにくい条件が重なっていることを感じつつ，この１年半を過ごしてきています。というのも，私たちの学校では，その時々の管理職や担当者が判断して，方針を変えていくということが少ない学校なのです。学校の歴史からくる伝統的な考え方を大切にし，その考え方に基づいた教育実践を，ゆっくりと時間をかけて紡ぎ続けている学校なのです。それだけに，学校改革マネージメントの視点で学校を改革しようとすることに取り組みづらい現状がありました。その意味では，この１年半は，比較的苦しみながら過ごしてきたと言えるのかもしれません。

一方で，長年，奈良女子大学附属小学校に勤務し続けてきましたので，これまでの自分の足跡を見つめ直す機会を得られたことは，本当にありがたかったと感じています。これまでの実践記録を読み直し，その時々の自分がどのように考え取り組みを進めていたのかを振り返る作業は，本当に楽しい作業でした。また，その作業をしてきたからこそ，今現在の自分の考えがより明瞭になってきていることも実感しているところです。現在進めている長期実践研究報告書は，やはり，私がこれまでに取り組んできた足跡をまとめつつ，これからの学校改革に必要とされるような考え方をまとめることが，ひとつの中心になりそうに感じています。

ひとつの中心は，自分の足跡をまとめることになりそうですが，学校改革の視点での取り組みを何もしていないわけでもありません。教職大学院で学ぶ機会を得たおかげで，これまでになかった視点で教育のことや学校の役割のことを見つめ直すことができたことも実感しています。特に，私たちの学校だからこそできる教育界への貢献を，いかに実現していくのかという視点や，私たちの学校が守っていくべき伝統が何なのかという視点は，この１年半に生まれてきた視点だと感じています。そして，微力ながら，私たちの学校の取り組みを，他の学校の先生方や研究者の方々につないでいただくための取り組みや，若い世代が増えてきた私たちの学校の中で，忘れてはならない伝統の考え方を伝えようとする意識も強めてきたと感じています。それらのことも長期実践報告書の中でまとめていきたいと考えているところです。

学級担任をしつつ，教育実習や教職大学院インターンシップのメンター教員も務める中で，実践報告書の執筆に取り組むことはなかなかに難しいことです。正直，完成させるところまでたどり着けるかどうかが不安な日々を過ごしています。ついこの間「ああ，もう夏休みが終わった。」と思っていたのに，気が付けば１０月です。冬季集中講座の時間だけでは，到底書き上げることなどできないことは分かっているのですが，それでもやはり筆は進まないものです。少しでも時間を見つけて，書き進めていきたいと思っている今日この頃です。

# インターンシップ/木曜カンファレンス報告

## 自分事として考える

授業研究・教職専門性開発コース２年/福井市明新小学校　浅島　眞言

長かった教員採用試験シーズンを終え，朝に冷え込む季節となった。インターン先では，体育大会といった一大イベントを終え，ドタバタした日々から落ち着いて学習に取り組む時期に移り変わってゆくだろう。

この半期を振り返ると，インターンでの生活はもちろんだが，教員採用試験の面接対策で，自分を見つめ直したことが最も印象的である。過去に出題されたとされる質問について，私は「面接ノート」に，自分の思いや考えを書き記し，私自身を見つめ直していった。その中で，一つだけ自分では答えにくい質問に出会った。

**「あなたの長所はなんですか？」**

自分はこれだと思っているけど，誰かからみるとそうではないし，むしろ…。といった妙な引き目を感じて答えられなかった。そう感じて，私は仲間の院生に「私の長所を教えて～」と何人かに聞いた。こんな自分勝手な質問にも真剣に時間を使って答えてくれる院内の雰囲気が，私は好きだ。電話で伝えてくれた人，ブレインストーミングの要領で言葉にしてくれた人，「一日待ってくれる？」と，次の日に読むのも面倒なぐらいの長文をLINEで送ってくれた人。いろいろなパターンで教えてくれた。いろいろな答えから，一番私自身がこれだと感じることができたものを答えようと決めていたので，いろいろな答えを俯瞰し，一つ決めた。

**「私の長所は，要領が良いところです」**

ボケーっとしていると，一日が過ぎてしまったことが，ざらにある私にとっては思いもしない考えだったが，振り返ると何気なく自分が大事にしてきたようなものがみえてきたように思う。それは，個人だけの場合は，「何をしなければならないか。自分は何がしたいか。では，そのために何をするか。その順番は？」を頭の隅に置いて生活することである。また，それが組織の中の一人として行動するのであれば，「何をしたほうが良いか。何をしなければならないか。どうすれば，スムーズになるか。」を頭の中心において生活をしていることである。最初は，違和感もあったが，この答えをくれた院生は，同時に「抜け目がない。人に弱点を見せない感じ。」と言葉をくれたことで，組織の中の私を捉えてくれたのだと思った。

話は変わるが，M２となり半年が過ぎた。週に１度の木曜カンファレンスをM２として企画・運営の中心となり半年である。また，インターン先では２年目となり，ある程度の学校の流れにも見通しをもって，インターン生としてできる何かを考えて行動しなければならない時期にある。

木曜カンファレンス運営に関しては，特に共通理解を図るために，どんな手立てを取るかという組織の中の個人的な役割を勝手に考えている。昨年度までは，会議をするとなると，言葉をホワイトボードに集めて，そこで理解を図るというような形を取っていた。会議は，何日も連続して行われるわけではないので，忘れっぽいというか，板書を見直してから臨む面倒さもあり，会議の冒頭に前回の会議の内容を「思い出す」という行動を挟むことがしばしばあり，なんと効率の悪いことだろうかと感じている私がいた。そんな時，昨年度お世話になっていたインターン先の先生が「会議についていくの必死やわ。なんか紙でもあれば，今何の話をしているか分かるんだけど…」という，何気ない言葉が頭に残っていた。そんなこともあり，私は今年度から，会議がある際には，①前回までの振り返り②今日すること，という最低２点がわかるようなレジュメを作っている。ねらいとしては，全員が話についていけること・誰かの発言を待って自己表現をしない人を作らないことである。会議として集まっているのに，「今日なにする？」から始まっていては元も子もない。会議を早く終わらせるためにも，どうすれば共通理解が図りやすいか見通して一手先に打つことが大事に思う。

また，インターンシップでは，学びを頂く分，何か還元したいという思いを持って，先生にはできないけれど，インターン生なら手が届くような役割？仕事？を自らに担っているつもりである。昨年度を振り返ると，掃除時間は特に比較的手を空けることができると感じていたので，子どもたちも先生方もできないような掃除場所はどこかを探して，掃除をしている。前期は体育大会もあり，子どもたちが怪

我なく全力で取り組んで欲しいという思いから，グラウンドの石やゴミ・枯れ葉拾いをした。また，施設技師さんが刈られたグラウンドの雑草を熊手で集め，整備のお手伝いをした。ある子どもが，「地味な仕事ですね。いじられますよ。」なんて声をかけられたこともあった。（君たちのためだよというのも変だし，本当に意味があるのか曖昧だったので「そうだね。」と流した。）ただ，どこかで子どもたちのためになると信じている。限りなく少ないかもしれないけれど，学校に還元できることはある。後期も何か探して，学校に還元していきたい。

福井の生活も残り半年になる。自分にできることを探しながら，学びを進めていきたい。

# 福井大学教育学部附属特別支援学校

## 第15回

# 「教育研究集会」のご案内

全体研究テーマ

## 子ども・大人が協働する学校生活づくり

## ～学びのつながりに焦点を当てて～<最終年度>

期日　　平成30年　11月16日（金）

会場　　福井大学教育学部附属特別支援学校

| 9:40 | 10:00 | 11:00 | 11:15 | 12:00 | 12:40 | 13:10 | 13:20 | 14:50 | 15:00 | 16:10 | 16:30 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 受付 | 授業公開 | 移動 | 全体会Ⅰ | 昼食 | ポスター発表 | 移動 | 学部研究会 | 移動 | 講演会 | 全体会Ⅱ | |

### 授業公開

| 学部 | 活動形態 | 組<br>グループ | 活動名 | 指導者名 | 場所 |
|---|---|---|---|---|---|
| 小学部 | 「のびのびタイム」 | 1組 | きょうはどっちであそぼかな | 大田春那　森阪香織<br>伊藤はる香 | 小1組教室 |
| | | 2組 | やりたい遊びを<br>いっしょにしよう | 加納佳晃　常廣和美<br>島田稚佳 | 小2組教室 |
| | | 3組 | いっしょに遊ぼう<br>～かくれんぼ・けいどろ～ | 芝　智美　夛田哲也<br>園谷朋恵 | 遊戯室 |
| 中学部 | 「くらし」<br>『クラスくらし』 | 1組 | お店調べで見つけた〇〇を作ろう | 野瀬雅代　船谷友代<br>山口真生 | 中1組教室 |
| | | 2組 | 音楽会をしよう | 篠田英美　広瀬貴子<br>天方和也 | 音楽室 |
| | | 3組 | ウサギを飼おう | 小嵐英輔　松村幸恵<br>大坂真喜子 | 中3組教室 |
| 高等部 | 「くらし」<br>『オープンクラス　生活』 | 1班 | 将来の生活を見つめよう② | 岩佐成樹　久保　文<br>松山千夏 | のぞみの家 |
| | | 2班 | 現場実習でがんばった自分を語ろう！ほぐそう！ | 滝波雅文　仲村孝子<br>嶋﨑ふみ | 高B組教室 |
| | | 3班 | くまっこさんとやっぱり交流<br>～カラフィットダンス③～ | 服部裕之　吉田朋子<br>島津有来 | 高等部ホーム |

講　演

## 「新学習指導要領と特別支援教育」

国立教育政策研究所　総括研究官／（独）国立特別支援教育総合研究所　客員研究員　　福本　徹氏

※詳しくはホームページをご覧ください

# 福井大学連合教職大学院
# 秋期説明会

## 平成30年
## 10月20日（土）13:00～

13:00からの全体説明のあと、概ね14:00から個別相談となります。

**福井大学文京キャンパス**
**総合研究棟Ⅰ13階　大会議室**

募集要項を入手できます！
過去問を閲覧できます！

- 授業研究・教職専門性開発コース
- ミドルリーダー養成コース
- 学校改革マネジメントコース

福井大学教職大学院は、平成30年4月から、福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科としてスタートしています。

### 平成31年度第1回　学生募集日程

出願期間：11月　2日（金）～11月　8日（木）
試験日　：11月24日（土）
合格発表：12月　4日（火）

### ☞小学校教員免許取得プログラム

長期インターンシップを活かし、3年間で必要単位を取得すれば、小学校教諭1種免許状が取得できます。
課程を修了すると、小学校1種免許状が専修免許になります。
授業料は、通常の2年分の授業料を3年間で分割納入することになります。

（注）教職大学院では、中学校等の教育職員免許状を取得していることを前提としています。
（条件については、事前にお問い合わせ下さい。）

**出願を考えている方、関心のある方は、お気軽に以下へご連絡ください。**

福井大学学務部入試課
TEL：0776-27-9927　E-mail：g-nyusi@ad.u-fukui.ac.jp
※氏名・電話番号・所属、志望専攻およびコースをお知らせ下さい。

創造力、実践力。
国立大学法人 福井大学
UNIVERSITY OF FUKUI

【 編集後記 】

ある方と 17 年ぶりに一緒に仕事をする機会に恵まれました。当時の私は非常に未熟でした（今もまだ成熟しているとは言えませんが、当時よりは多少は成長していることを願います）。お互い年齢と経験を重ね、再び何かに一緒に取り組める。人生こんな素敵なことがあるのだと思うと、自分の過去も今も未来も大事にしようと思えます。（半原）

教職大学院 Newsletter　No.115
2018.10.13　内報版発行
2018.10.31　公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院　福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507　福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp